

Title	カリタスのアニメーション活動(パネルディスカッション「震災への関わりと震災の語り」)
Author(s)	菊地, 功
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 54-62
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5336
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【第三回東日本大震災国際神学シンポジウム】

パネルディスカッション「震災への関わりと震災の語り」

カリタスのアニメーション活動

菊地 功

東北は私の故郷である。私は岩手県の宮古市で生まれ、盛岡で小学生時代を過ごした。その意味で、今回の大震災は、私にとって懐かしい三陸の沿岸部の風景を一変させ、故郷の友人たちからこれまでの生活を奪い取った災害として、個人的にも大きな意味を持っている。

私はカトリック教会の人道支援団体であるカリタスアジアとカリタスジャパンの責任者を務めている。カリタスはバチカンに本部を置く一九五一年設立の「国際カリタス」を中心に、世界各地一六〇以上の地域カリタスからなる連盟組織である。国際カリタスは国連経済社会理事会第一級認定の国際NGOである。日本では日本カトリック司教協議会の社会司教委員会を構成する組織として、一九七〇年に創立された。国内外への援助活動、四旬節「愛の献金」その他の募金活動、また社会福祉活動の促進のための啓発活動や協力のための連絡・調整・助成などの活動を行っている。なおアジア地域のカリタスはカリタスアジアを構成しており、現在メンバーは二三のカリタスである。

震災発生後に故郷で見たこと

さて、今回の震災発生直後から、海外のカリタスによる支援申し出があり、即座に電話を通じた会議で今後の対応を検討した。とにかく現地の様子を見なければ計画のたてようもないので、震災直後から仙台へ入る道を模索した。高速度路が閉鎖されたことや、ガソリン不足が伝えられたことから手間取ったが、それでも三月一六日には当時さいたま教区司教であった谷大二司教と一緒に、カリタスの職員を伴って、山形から峠を越えて仙台へ入ることができた。

その日には仙台教区本部へ出かけ、仙台の平賀徹夫司教や小松史朗教区事務局長と支援計画について話し合い、それから全国の教会による支援の調整にもあたらなくてはならなくなり、一カ月ほどはバタバタと仕事に追われた。震災から一月経った四月にやっと時間がとれ、宮古へ出かけることができた。幼なじみの幼稚園園長が宮古市の田老地区に連れて行ってくれた。彼女の家族は幸い無事だったものの、田老の防潮堤の内側にあつた彼女たちの家は津波で流されていた。子どもの頃から見知ったそびえ立つ城壁のような防潮堤は見事に破壊され、その一部は粉々になり流されて港の中に散らばっていた。

無残な姿をさらしていた田老の港を見下ろす小高い丘に立つてみると、港とは反対側の海岸沿いに立つ「山王岩」という高さ五〇メートルほどの岩が見えた。陸地からちよつと離れたところに海に対峙する壁のようにそびえ立っている。私の友人は津波の直後、城壁のような威容を誇っていたコンクリートの防潮堤が粉々に破壊された様を見て、山王岩もまた、ひとたまりもなかっただろうと確信したそうだ。しかし数日後にこの丘に登り、おそろおそろの反対側をのぞいてみると、山王岩は何事もなかったかのように、そこにそびえ立っていた。実は私も、震災直後には山王岩は破壊さ

れただろうと勝手に思っていた。しかし現場に足を運び、田老港を見下ろす丘から、その向こう側にある山王岩の無事な姿を見、その反対に人間の技術の粋を結集した壁の無残な姿を見た時、私は、人間の技術やその基礎となる人間の知識のなんと空しいことか、そして神の創造の業のなんとすばらしいことかと、感動を覚えた。

この出来事だけにとどまらず、今に至るまで明確な道筋の見えない福島原子力発電所の事故処理問題を含め、今回の大震災は私たちに、現代社会の人間がどれほど自己過信に陥っているか、また現代社会に生きる私たちがあまりにも見事に世俗化され、人間をはるかに超越する創造主である神が存在するのだということを、どれほど非現実的なこと、絵空事にしてきたか。さらには私たち人類が創造主である神の前で、どれほど不遜な思い上がりをもって生きてきたのか。どれほどまでに利己的であったのか。今回の大震災は私たち現代社会に生きる人間一人ひとりに、その生き方に対する大きな警告を与えているように思う。

さらに言えば、一体この国は何を大切に、何を犠牲にして発展してきたのかがこの大震災を通じて明らかになった。そのことを震災直後には多くの方が多少なりとも理解されたのではなからうかと思う。しかし時間の経過とともに、これまでの歩みを否定するようなネガティブな事柄は忘れ去られ、再び私たちは以前と同じ道を歩もうとしている。つまり、今の人生をより楽しくより安楽に暮らすことを優先し、手間と時間と金のかかる事柄から目を背け、さらにはそのために、助けを必要とする弱い立場の方々を切り捨てていくというような価値観を優先しようとしていると感じる。

援助の現場で感じてきたこと

さて、私は一九八六年から九四年まで、西アフリカのガーナという国の電気も水道もない山奥の村の教会で、宣教師をしていた。その後日本に戻ってからは、九五年のルワンダ難民キャンプでの調整員の仕事を始めとして今に至るまで、冒頭で申し上げたカリタスジャパンの様々な立場で海外援助業務に関わってきた。ガーナでの毎日の体験や、その後、カリタスジャパンでの海外援助における現地体験を通じて、私の心に刻み込まれた言葉がある。それは、貧困や飢餓、そして災害や紛争という厳しい現実の中で生きている方々の「俺たちを忘れないでくれ」という叫びである。

多くの現場で、海外から駆けつけた国際NGOは、半年もすれば次々と撤退してしまう。そのときに取り残される現地の人たちの絶望感がいかほどであるかは、そこに生き続ける方々にしかわからない。「自分たちは、見捨てられてしまった」という思いを苦しんでいる当事者たちに抱かせるような援助活動をしてはいけないと、常に心掛けてきた。

しかし同時に私は、世界の多様な現場で厳しい状況に生き、助けを必要としている多くの方々と何度も出会う中で、単に時間的に長期間にわたって関わり続けることだけが、「あなた方を忘れてはいない」という事実を証明するのではないことも学んだ。もちろん時間的に長期にわたって関わり続けることは重要だけれども、それ以上に重要なことがもう一つあると思う。それは、私たち援助をする者の存在を通じて、その地に住む方々の心に変化をもたらすことである。心の変化を伴わない援助では、どんなに時間を費やしても、将来につながるものを、前向きな結果を生み出すことはできない。

災害の直後に直接に手助けするのは大切である。しかしこれは短期的な意味しか持たないし効果も限定的である。い

わゆるサンタクロース的な援助、物資の支援は、短期的には意味があるが、受益者は限られてしまう。

これに対して、心に変化をもたらす援助、すなわち希望を失い不安に生きる人たちの心に、自ら立ち上がり前進する道を切り開く希望と勇気を生み出すことは、それは長期的な意味合いを持ち、効果も広範囲におよぶ。

つまり「決して被災者を、被災地を忘れない」といつても、ただ単に被災地に居続けるということではなく、できる限り現地の方々に希望と勇気を生み出していくような関わりをしていきたい。そうできなければ結局、「よその」である援助者が立ち去ってしまう時に、「見捨てられた」という感情のみが残る。

「よその」という言い方をしたが、現地にいる方々こそがすべての主役であつて、援助にあたる者はあくまでも「よその」として脇役であることを常に心にかけることも大切であろうと思う。もちろん、その地に住み込んでしまつてその地の人になつてしまえば別だが、そうでない場合、どんなに評価をされ喜ばれていても、いつかは帰ることができる家が安全などどこにある「よその」は、いつまでも脇役であることの自覚を持つべきであろうと思う。

その意味で私は、災害からの復興支援に携わる者は究極的には、心に変化をもたらす存在、いわばアニメーターであることを基本とすべしと思つている。

東日本大震災へのカトリック教会の取り組み

冒頭でも紹介したが、日本のカトリック教会は、二〇一一年三月一六日にカトリック仙台教区（青森、岩手、宮城、福島）本部にサポートセンターを開設し、カリタスジャパンが側面支援をする形で、国内外からの支援をとりまとめられて被災地での活動を行つてきた。その間、被災沿岸部の各所に点在するカトリック教会の建物を利用して、ボランティア

活動の拠点（ベース）を設置した。現在それは八カ所設置されている。また全国の教会からの支援を調整するために、日本カトリック司教協議会に復興支援担当を設置し、私がカリタスジャパンと兼任でその責任者を務めている。

被災地におけるボランティアベースは、基本的に現地の社会福祉協議会との調整のもとで活動を行うことにしてきた。だから当初はがれきの片付けや被災家屋の清掃が主な活動であったが、現在では仮設住宅におけるカフェ設置など、避難しておられる方々への精神的な支援が主となっている。資金的にはカリタスジャパンが支えている。現在の国内外からの募金受付状況では、少なくともあと四四年間は同様の活動を資金的に支えることができると思込んでいる。

同時にカリタスジャパンでは、国際カリタスを通じて海外のメンバーカリタスからも資金提供を受け、特に行政からの支援対象とならない地域共同体の様々なプログラムを支援することも模索してきた。例えば、夏祭りの火花を打ち上げる費用や、いくつかの仮設商店街では、行政から費用の出ない仮設商店内装工事に関してかなりの部分を負担した。もちろん物品供与も当初は行ったが、最大のもものは、最初の冬に仮設住宅と借り上げ仮設を対象に、他のNGOと共同で、灯油ストーブ支給の支援を行ったことではないかと思う。

こういつた活動を進めるにあたっては、どうしても地元自治会や仮設住宅の自治会の方々との連絡調整が不可欠である。当初から、現地での活動ではすべての教会関係のグループが直接カトリック教会を名乗らず、「カリタスジャパン」の名称を使用し、同時にその成果を大きく報道されることのないようにという方針をとった。それは、第一に宗教団体の布教活動として警戒されることを避けようと考えたことと、第二には先ほども申し上げたように、主役は私たちではないからである。もちろん、いわゆる直接の布教活動は一切行わないことも申し合わせた。

教会施設関係へのカリタスジャパンからの直接支援は、学校や病院をのぞいてほとんど行っていない。また学校や病院などへの支援の対象はカトリック関係に限らず、例えば那須にあるアジア学院の校舎建て替えには、カリタスジャパンとアメリカ合衆国のカリタスCRSとで、かなりの部分を支援させていただいた。もちろん全体の支援活動も、宗

教による区別は一切行っていない。

だからといって実際の活動をする中で、私たちのキリスト者としてのアイデンティティをことさらに隠すことはしていない。次にお話するが、例えばボランティアベースでは、毎日、一日の振り返りの分かち合いと祈りの時が持たれている。

復興支援活動を通じた「あかし」による福音宣教

最後に、活動を通じてどのように福音を語っているのかを、お話ししようと思う。

すでに触れた通り、具体的な活動の中でことさらにキリスト教であるとかカトリックであるとかを前面に出してはいない。同時に、それだからといってカリタスジャパンの名称の背後に、私たちの実態をすべてを隠しているわけではない。

そもそも活動拠点は、地域のカトリック教会に設置されていることが多く、一目でキリスト教の団体の活動であることがわかる。これまで受け付けてきた全国からのボランティアの方々の半数以上は、カトリック教会やキリスト教と全く関係のない方々で、その多くは、それほど厳しい条件もなしに、しかも現地で宿泊場所があるボランティア受け入れ団体はそれほど多くはないからという理由で申し込んでこられた。その中かなりの割合で、いわゆるリピーターの方がおられる。なぜリピーターになるのか、残念ながら詳しく調査をしているわけではないが、各ベースからの報告を基に推測すると、主に次のような理由が挙げられる。

ボランティアベースでは、当初全国からシスター（修道女）方が連続して派遣されて常駐し、食事などの世話をし

いたが、毎日の活動のあとには、シスター方を中心に必ず祈りの時間と分かち合いの時間を設けた。ボランティアは祈りには自由参加であるが、やはり一日の最後の振り返りの時間に、多くの方が重要な意義を見出され、また祈りの雰囲気心が深く刻む何かを与えたのではないだろうか。つまりここでは私たちキリスト者による、存在と日々の生活による具体的なあかしを通じての、いわば「あかしによる福音宣教」を行ってきているのではないかと思っている。ことさらに言葉でキリスト教を語るのではなく、そこにいるキリスト者が生きる姿勢で「あかし」をすることによって、福音を伝えていく。

同時に、被災地各地では、行政を含め地元の方々からボランティアたちは「カリタスさん」と呼ばれているとの報告もあった。「カリタスさん」はいつまでいるのか、どこまで一緒についてきてくれるのか。教会は、災害の前にも、災害の最中にも、災害のあとにも、その地元の一部としてそこにあり続ける。そしてカリタスの活動が教会そのものである限り、同じように「カリタスさん」も、災害の前にも、災害の最中にも、災害のあとにも、そこに居続ける。教会は「よそもの」を包括しながら、同時に地元の一員として一緒になって、将来へ向けての希望を生み出すためのアニメーション活動を行い、それを通じて福音を「あかし」しているのがある。

教皇フランシスコの数ある言葉の中から一つを紹介し、終わりにしたいと思う。

「神の民の使命とは何でしょうか。世に希望と神の救いをもたらすことです。神はすべての人がご自分の友となるよう招いておられます。このような神の愛のしるしとなることです。そして、練り粉をふくらませるパン種となり、味をつけ、腐敗から守る塩となり、人々を照らす光となることです」

派手な働きでなくてもよい、世間の耳目を集める活躍でなくてもよい。忠実に福音の精神に生き、現場での関わりを

深めることによって、私たちは福音をあかすことができるかと信じている。社会の中で、パン種として「神の愛のしるし」でありたいと思う。